

Modesty(モデスティ)

近頃はやりのスーパードクターテレビ番組で思う英単語です。日本語では謙遜と訳されますが、節度や上品さ、しなやかさ、中庸などの穏やかな広がりを表す言葉です。これは生活や仕事上での最も基本的な、あるべき姿勢を示しています。現実の医療は複雑な要因が絡んで、教科書通りの単一の経過や結果にはなりませんので、常に謙遜の心で改良を加え続ける必要があります。対語は不遜です。

専門家の中で尊敬される先生方は、良い結果はチームや社会のお蔭であり、またいいことばかりではない事などもご存じなので、すべてがうまくいっているように見せかけるワンマンショーのようなマスコミには安易に登場されません。そもそもテレビは娯楽的人工的で、絵になるところ、好ましいところだけを切り出し、強調して編集しますので、その陰で思うようにいかず、泣いている人がいる現実は省略されます。視聴率や利益が優先され、本当の姿は隠されてしまいます。

19世紀末のイギリスの天才作家オスカーワイルドの「ドリアン・グレイの肖像」というミステリアスな小説があります。主人公ドリアンは美貌の青年で社交界の華です。彼が描かせた自分の肖像画に年を取ってもらい、自分は若いままで、偽りの華やいだ生活を送り続けますが、次第に心が蝕まれ、最後に悲劇が起こります。祭り上げられているうちに甘い言葉に目がくらみ、意に沿わない事には目を背け、変質していくのです。テレビカメラには似たような作用があるようです。私の尊敬する、ある高名な整形外科の先生は、一緒に写真を撮ることも遠慮されます。奥様に「カメラに魂を吸い取られる」と言われているからね、と冗談のようにおっしゃるのです。先生も奥様も、Modestyが底流を成しているように思われます。

奢らず、有頂天にならず、また落ち込みもせず、穏やかに成長を続けることが幸せだと思いますが、心の片隅に Modesty という言葉を置いておけば、複雑にもつれたような問題も自ずとほどけていくように思えます。

